

# わかちあいプロジェクト

## NEWS No. 15

2000 June



### 遠い道のりをはるばる渡って

中島 佳織 わかちあいプロジェクト スタッフ

4月20日から10日間インドを訪問し、わかちあいプロジェクトが公平貿易（フェアトレード）として購入しているダーズリン紅茶の生産現場と、パッケージに使っている紙の工場を視察し、フェアトレードの現場を実際に見ることができました。ダーズリン紅茶といえば、世界三大銘茶のひとつとしてありまして有名ですが、海拔1500-2000メートルという高地で、首都のニューデリーから飛行機で3時間半、さらにひたすら山道を車で3時間という場所で栽培されているのです。日本でこうしておいしい紅茶が飲めるまでには、じつに多くの人の手がかえられ、遠い道のりをはるば

る渡ってきているということを実感しました。

FLO（フェアトレードの国際機関）の定める基準により、われわれ紅茶の消費者は1キロ当たり150円の奨励金を支払っており、その奨励金は労働者の福祉と教育に使用されるよう決められています。今回、ダーズリン地方のセリンボン茶園とサマベオン茶園の二ヶ所を訪ねましたが、特に後者は1990年からフェアトレード運動のもとに運営されており、奨励金によって数々の社会事業が進められています。例えば、初等・中等教育の提供、大人のための教育プログラム、読書プログラム、女性のための縫い物教室などです。

# コーヒー紅茶プロジェクト

2



### 誰のためのグローバルゼーション？

### トランスフェアは、立場の弱い人たちのための国際基準



奨励金で購入した牛

これらは、茶園地域全体の生活向上を目指したもので、茶園労働者に限定せず、地域住民全体に行われているサービスです。現に、中学校を見学しましたが、生徒の半数以上は茶園労働者以外の家庭の子供たちでした。地元の人々の話では、教育が行き渡るようになった結果、家族計画の浸透、乳児の死亡率低下、不衛生な水からの伝染病の減少などの変化がもたらされたということで、確実に成果が出ているのです。

セリンボン茶園のマネージャーの話によると、世界的に有名な紅茶会社も何社かの茶園から紅茶を購入しているそうですが、こうした購買力の強い大会社こそフェアトレードの概念を理解して奨励金を支払うようになれば、地域住民の社会福祉をより充実させていくことができます。ですから、われわれNGOは今後ますます、こうした企業に向けてのアピールを強化していくべきでしょう。

パッケージに関しては、まだフェアトレードの基準がないため、今回、紙の工場を訪問することには、実はちょっとした不安がありました。そこでは、労働者が劣悪な条件で搾取されていたとしてもチェック機能がないからです。しかし、幸いにも彼らは、きちんとしたフェアトレードの意識を持った社長のもと、正当な労働条件、賃金を確保されていた。パッケージは、紙作りからカットリング、ラベルの印刷まですべて手作りで、特にその手作りの紙は高品質で、日本の和紙に勝るとも劣らない美しさです。

ここで紙の原料100%コットン木綿の国産切手紙を手でつく



リサイクルペーパーを扱う会社の経営者のMahima Mehraというインド女性。環境保護に対するしつかりしたポリシーと、小規模生産者を大事にする経営理念を持っている。

昨年末に開かれた米田シムルでのWTO（世界貿易機関）閣僚会議に対して、多くの市民団体（NGO）が起こした抗議行動の映像は、まだ皆さんの記憶に新しいところだとも思います。経済のグローバル化、自由貿易化が推し進められるとうなるのでしょうか。簡単に言ってしまうと、力のある先進国がますます豊かになり、巨大な世界市場で戦えない途上国は置いていかれ、貧富の差はますます拡大していくのです。また、環境や人権が犯される危険性も高くなるだろうと言われています。こうした世界の動きからも、フェアトレードの果たす役割はますます大きくなってきています。



### ○奨励金で運営されているサマベオンの中学校

日本の小学校5年生から高校1年生に当たる6年間。教科書、授業料は学校が負担し、親は制服を用意する。ここには310人の生徒（うち女子約160人）が通っているが、半数以上が茶園労働者以外の家族の子供たちである。そのことから、紅茶の奨励金が茶園労働者だけではなく、広く地域全体に還元されているのが分かる。なかには2、3時間かけて遠いところから歩いて通ってきている生徒もいる。

